


深く暗い森の奥

糸で覆われた不気味な空間

そこに四肢の自由を奪われ少年がいた

彼の名はユミル
エルフ族の見習いハンターである

そして
ユミルが鋭く睨みつける先には
禍々しい生物が一匹……



今エルフ族に厄災をもたらしている
『害蟲』である

その禍々しい生物を目の前にしても
ユミルは怯むことはない

幼くも鋭い眼差しで
害蟲を睨みつけた

その姿は害蟲ハンターを志すに
相応しいものだろう

ただ一つ：
こんな恥ずかしい格好を除いては…

「うう…何だこの糸…
身動きが取れない…」

ユミルの衣服は害虫の糸に絡め取られる
恥ずかしい部分が露出してしまっている

ギ

ギ

二



そこに蜘蛛型の体から伸びた触手がユミルを襲う

『食べられる…!』
そう思ったユミルであったが…

この蜘蛛型の害虫の目的は別にあった

ズ
ズ
ズ

「や…やめろっ
変なところ…触るなっ!」

「くそっ…」

エレーナさんなら
こんな糸簡単に抜け出せるのに…!」

ニユル

ニユル

ニユル



エレーナとはユミルの師匠にして
凄腕の害虫ハンターである

その優しくも凛とした姿は
誰もが憧れる存在であり

エルフの里では
『金色の弓聖エレーナ』と
謳われている

ユミルは仕事でこの森に入ったきり
行方不明となった彼女を追ってきたのだ



(あのエレーナさんに限って失敗なんてしないはず…)

(でも…
もし何かあったのだとしたら
僕が助けなきや…)

(エレーナさんに
格好いいとこ見せるんだ…!)

襲い来る害虫の恐怖の中
彼は再び決意を固めた…

その時



ユミルの乳首と睾丸を
不気味な触手が包み込んだ

「はひっ!?!」



尿の勢いで陰茎をプルンプルンと振り回す姿は
あまりに惨めであり

恐怖のあまり縮こまった矮小な陰茎では
その運動に抗う術はない

かあああ...

それはユミルの自尊心を
ひどく傷つけた

だがそこに
追い打ちをかけるように...



睾丸の触手が蠢き始めた

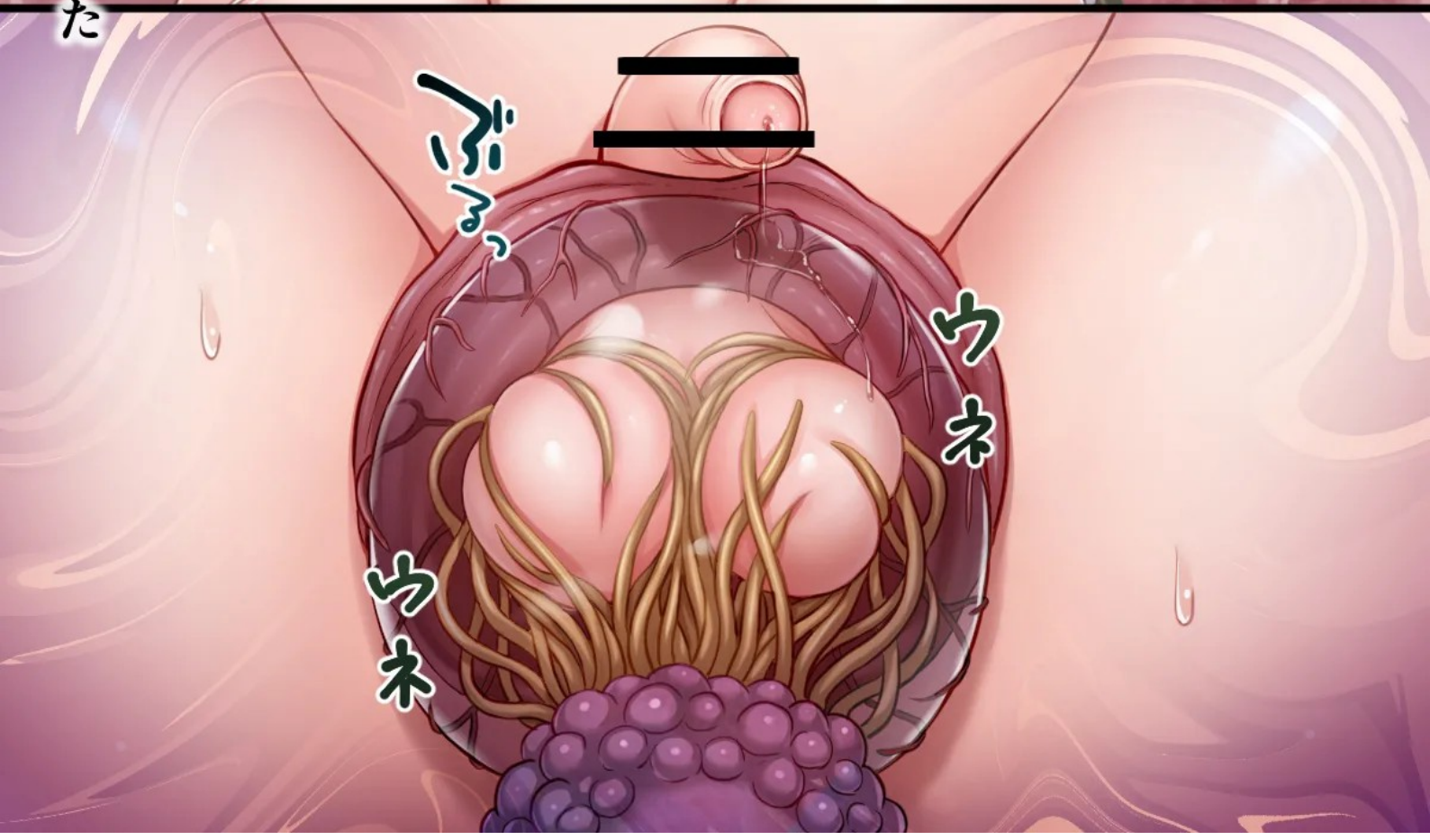
「おふっ…!!? 何…これ…?
僕の…金玉に…何してるの…?」

ブワッ…

害虫に問いたただすも当然返答はない
だが彼は感覚で理解していた

『金玉が食べられる』

事実触手はユミルの睾丸を捕食しようとしていた



ぶわっ

ウネ

ウネ

乳首を包み込んだ触手からは
得体の知れない液体が分泌され
徐々に乳首が膨張を始める

はぁ
はぁ

「や…やめて…
僕の体…どうするつもり…？」

そう
この害虫の目的は
人間のメス化及び繁殖である

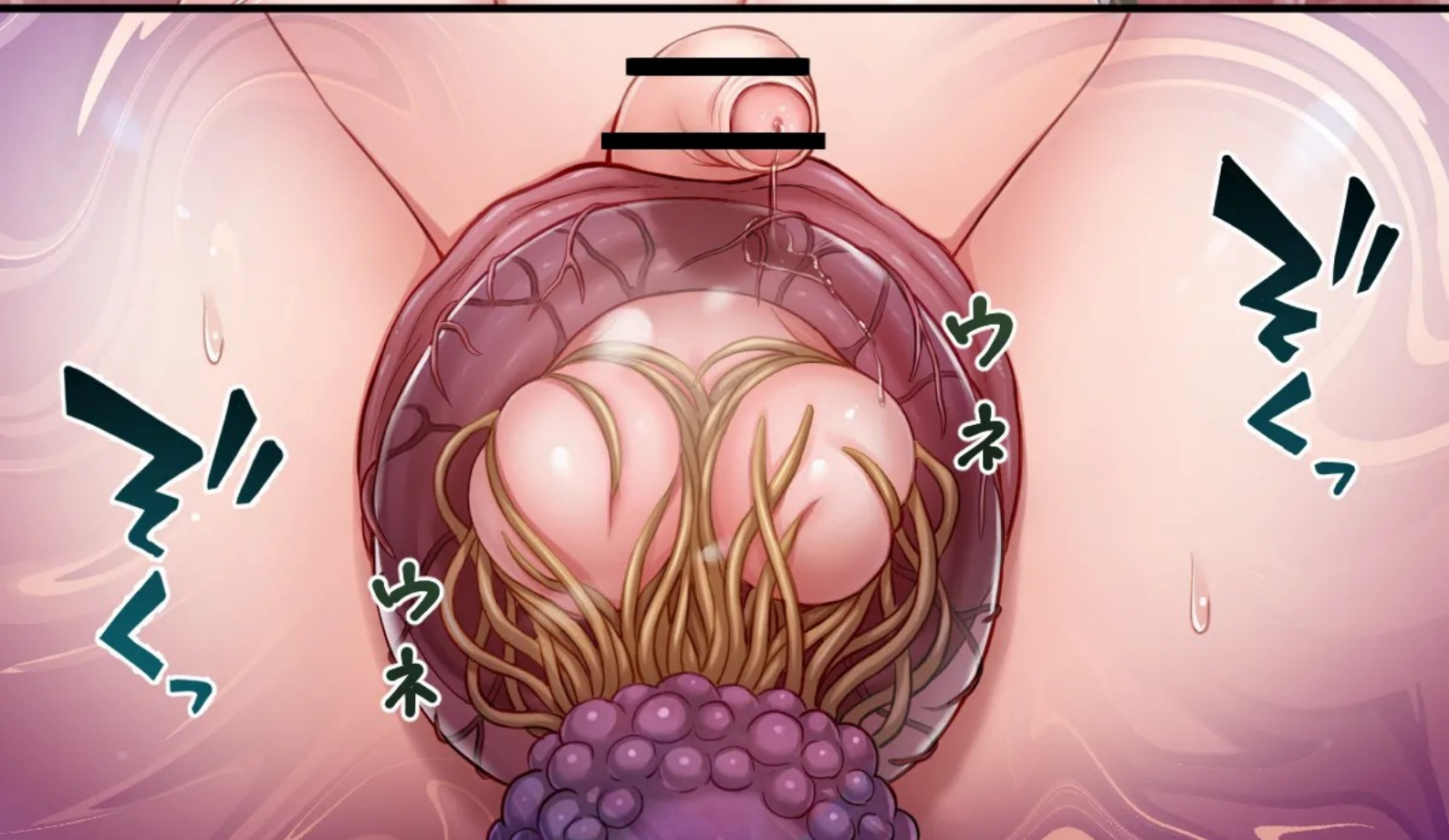
ブホ…

ズクッ

ウネ

ウネ

ズクッ

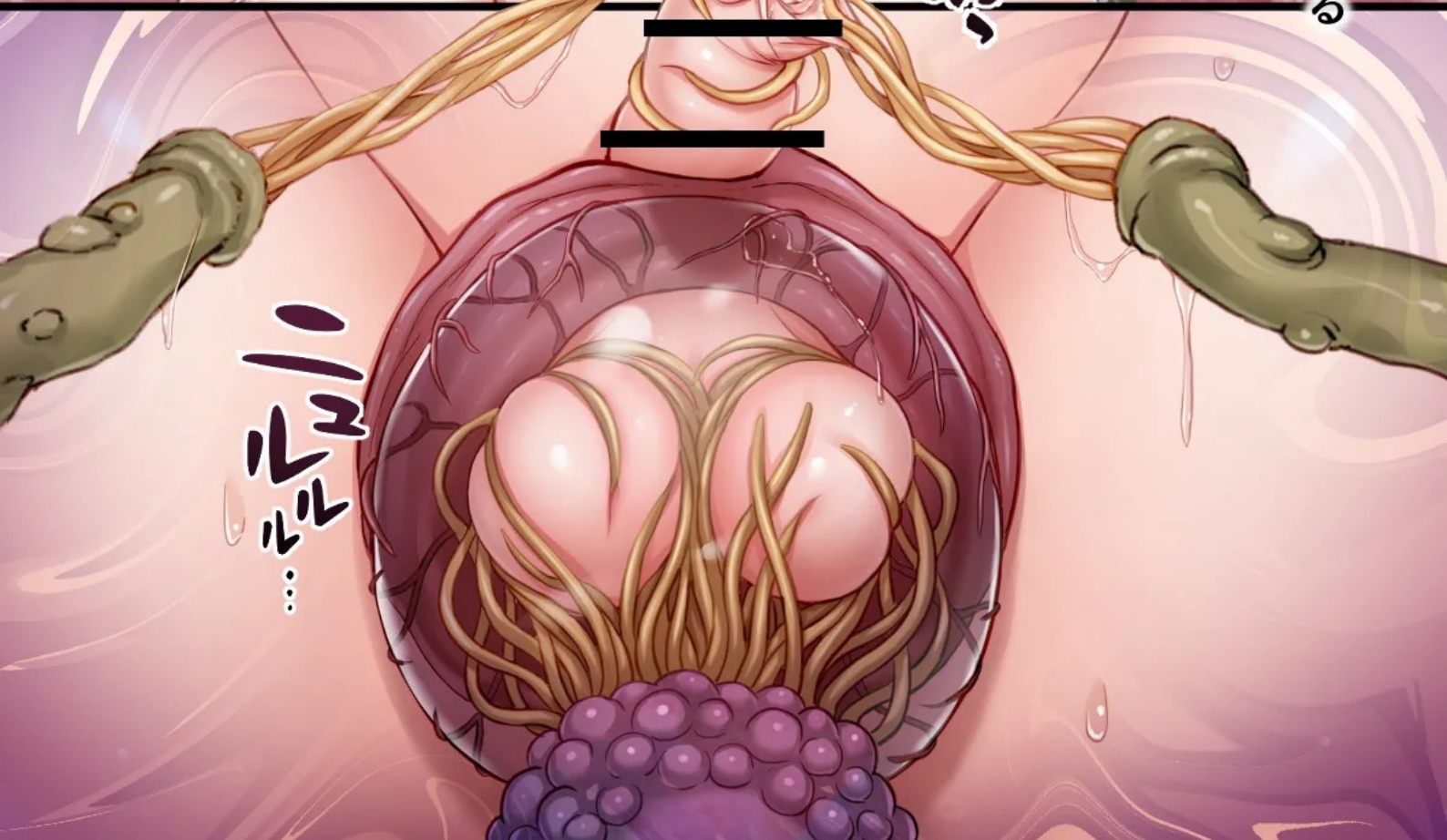


程なくして下腹部の触手が
ユミルの分厚い包皮に覆われた陰茎を弄り始める

「い…いや…
ちんちんの皮は無理に剥いちゃだめって…
エレーナさん言ってたのに…」

もちろん
それはユミルに快感を与えるためではない

メス化の妨げとなる精子を
無機質に絞り出すだけの作業である



いん…
いん…
いん…

外気にすら一度も触れたことのない
敏感な亀頭を乱暴に摩擦され

次第にユミルの包皮からは
恥垢とともにカウパーが溢れ始めた

ゴッ

ゴッ

「オチンチンからなんか出てる……？
オシッコじゃない……何これ……？」

生殖機能を失うことを
感知したユミルの脳が
精子の製造を加速させているのだ

く
う
ー

ズ
ク
ッ

ウ
ネ

ウ
ネ

ズ
ク
ッ

「ひっ…ひぎっ…！」

液体によって肥大化し始めた乳首には
注射状の触手が刺さり

メス化を促進する液体が人体の内部に広がっていく

「はあ…っはあ…っ！
む…胸が熱い…！」

まっ平らだったユミルの胸板は
もう男性とは言えないほど丸みを帯び
乳首もビンビンに勃起していた



さらに…辜丸の咀嚼はさらに強くなり
金玉が悲鳴を上げる

「やあつ！…もうやめてっ！
僕の金玉壊モグモグしないでっ！」

あ、あ、

害虫の液体により痛みは緩和されているとはいえ
辜丸が歪んでいく感覚は
身の毛もよだつ恐怖をユミルに与えていた

「なんか出ちやうの…！
オチンチンから変なオシッコでひゃいそうなのっ！」

くちゅ
くちゅ
くちゅ

ギムッ

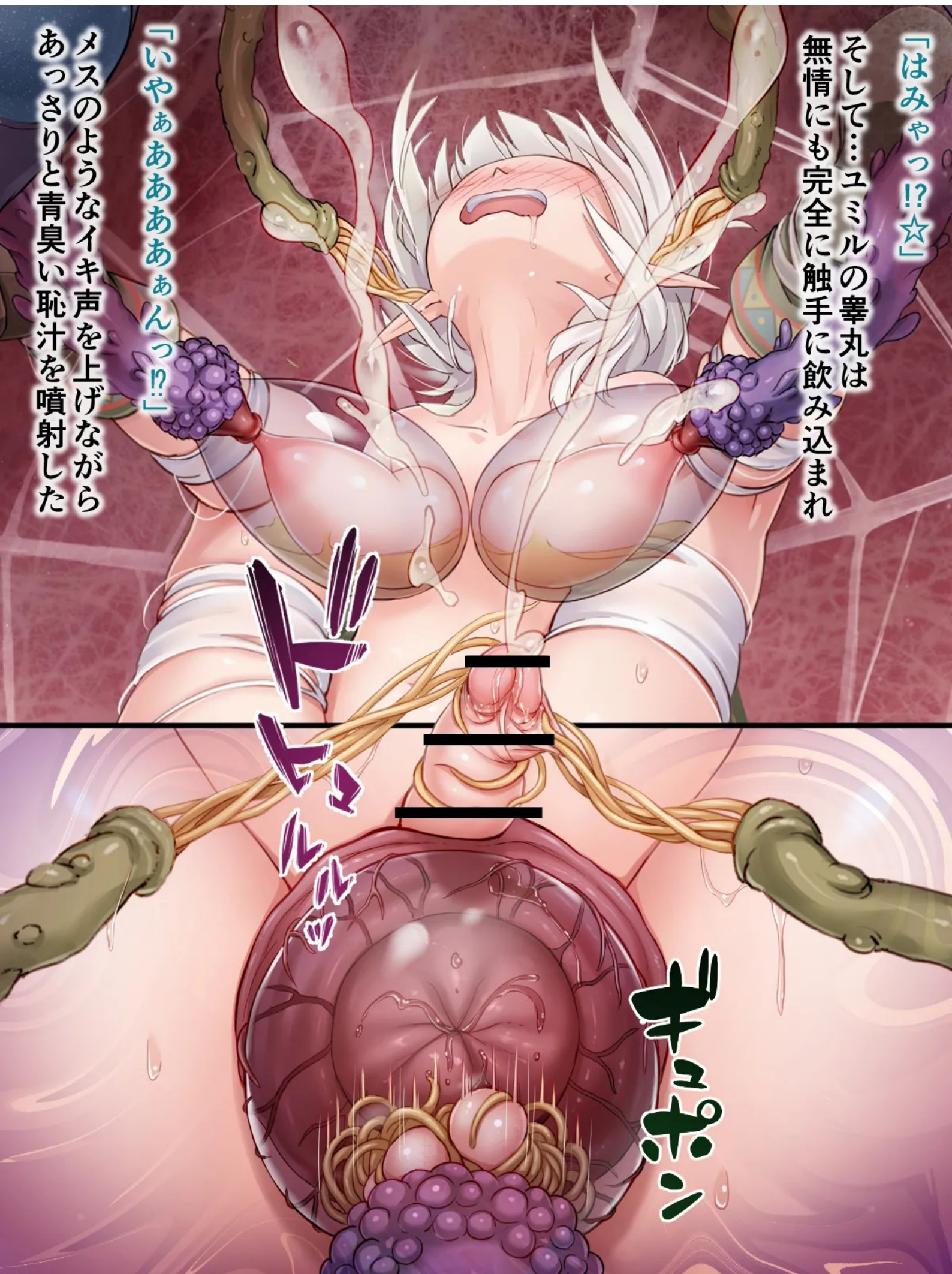
ギムッ

「はみやつ!?☆」

そして…ユミルの睾丸は
無情にも完全に触手に飲み込まれ

「いやあああああんっ!」

メスのようなイキ声を上げながら
あっさりと青臭い恥汁を噴射した



キッパッ!

「ひっ…ひっぐ…」

初めての射精体験に
暫く動揺していたユミルだったが
彼の心はかろうじて折れてなかった

ぐんぐん…

（しっかりしろ…
こんな姿エレーナさんに見せられない…）

しかし：飲み込まれた睾丸の場所に
一筋の割れ目が形成されていることに
彼はまだ気づいていなかった

||

プル

||

||

プル



そしてユミルは目を前方に向ける

そこには完全に苗床と化している女が
害虫の糸によって繭のように覆われていた

『こうなったら終わりだ』と
ユミルは決意を新たにす

はぁ

はぁ

ジワッ…

肉体改造を施されたであろうその肉体は
繭の外からでもその卑猥さが解るほどで
ビクンビクンと痙攣を繰り返しながら
今まさに出産の時を迎えようとしていた

「ふごっ♡♡ふごっ♡おおおおおおおおおおおおおおおおおおっ♡♡」

苗床の女性が獣のような呻き声を上げ
破水と共に繭が破られる

おっ♡♡
おおっ♡♡

(うわぁ！)

大きな尻が頭になり
ヒクつく女性器と肛門がユミルの目に飛び込んだ

グ
ン
カ
マ
ッ



(み…見ちゃった…)

(ずっと前お風呂で見たエレーナさんのと全然違うな…
ちよつと…いや…すごく下品だ…)

はあ
はあ

ん

ん

害蟲との度重なる性交により
緩みきった性器と肛門は幼いユミルを驚かせた
そんなユミルをよそ目に
害蟲は彼女の肛門に肉棒をあてがう



「やあん♡そんなにやことひやれたら
赤ひゃん生まれひゃう♡」

女性の声は明らかに艶を帯び
呂律が回っていない

くっくっ

ドクドク

ユミル

そんな彼女の出産を促すように
害虫は肛門から子宮を責め立てる
ユミルはその光景を気持ち悪いと思いつつも
何故か目が離せないでいた

「おっひ♡おおん♡
アナルぬぽぬぽ気持ちいい♡」

「害蟲しゃんのぶつといオチンポで
お腹圧迫されてえ♡
赤ちゃんが早く出たいよりって
蠢いてるよお♡」

おっ♡
おっ♡

ズ
ム
ッ

ズ
ム
ッ

肛門を刺激され
グロテスクな女性器から止め処なく愛液が溢れさせる彼女
その様は理性のかけらも感じさせない

(うわ…何あのおっぱい…)

彼女の母乳は害蟲が好む味になるよう
下品な肉体改造が施されており

それによって見た目も
変化してしまっていた

子供の男性器ほどに
隆起した乳首はビクビクと痙攣し

ドドメ色の大きい乳輪には
ブツブツが浮かび上がっている



はぁ

はぁ

ダ
ラ
マ
…

ん

ん

—
—
—
—
—

「ひやあん♡おっぱい吸っちゃらめえ♡
それは赤ちゃんのおっぱいミルクらよお♡」

「また乳首伸びちゃう♡
エッチな乳首になっちゃうよお♡」

そんな言葉とは裏腹に
彼女の乳首はビンビンに膨らんでいく

その表情が快感に緩んでいることは
繭の上からでも明らかであった



カポッ

キィーキィー

グニョニョ

グニョニョ
グニョニョ

「ね…ねえ害虫しやあん♥
乳首だけじゃなくてお口にもおちよーらい♥」

「お口にキス♥キツスしへえ♥」

「な…なんてことを…
あなたにはエルフ族の誇りは
ないんですか!？」

はぶっ

忌むべき害虫に愛の接吻を求めその様に
ユミルは怒りを抑えきれずに声をあげた

しかし…顔糸が剥がされたその姿に
ユミルは驚愕する

キニ♡

キニ♡



（うそ…だってエレーナさんは
誰も強くて…優しくて…）

『ユミル…大きくなったら一緒に
害虫からエルフの里を守ろうね』

（僕が憧れる大好きな人…）

そんな『金色の弓聖』エレーナさんが…



(こんな品性下劣なメスに成り下がるわけ…)

「ふごふごっ♡

ふごおおおおおおおっ♡

「害虫しゃんのベロチューで脳とろけりゅう♡」

ズンズンズン

んんんんん

「来る♡来る来る来るっ♡
赤ちゃんきゅるう♡」

「産みましゅ♡
エレーナ蟲の赤ちゃん生みましゅう♡」

ギギ

ズンズンズン



「んほっ♡んほっ♡おほっ♡」

「んほおおおおおおおおおん♡♡♡」

グリコッ



害虫が肛門に射精すると同時に
エレーナは獣のような声で絶頂し
膣から大量の害虫の卵を産み落とした

「あ……ああ……」

ユミルにとって絶対的な存在であった
エレーナの痴態は
彼の自我を破壊するのに十分な衝撃であった



「に…逃げなきゃ…」

ユミルの混乱した脳が唯一導き出せる答えは
逃げることだけであった

エレーナが負ける程の害虫に
見習いハンターが勝てる望みはない

しかし…

「あれ…力が…」

渾身の力で害虫の糸を断ち切ろうとするも
メス化の影響でユミルの筋力は
格段に落ちてしまっていた



「はぐうつ！」

害蟲が獲物の逃走を許すわけもなく
ユミルの肛門に野太い触手が突き刺さる

「いやああつ！離してっ！」

僕は女の子じゃないからっ！

そこじゃ子供作れないからっあ！」

自分はメスではないことを
必死に訴えるユミル

だがそんなものは害蟲には関係ない



肛門にドクンドクンと
得体の知れない液体が注ぎ込まれる

その液によって周辺の細胞が
死と再生を繰り返す

あ、

あ、

子宮卵巣腫といった
本来男性にない器官が形成されいく

「んっ…はあ…はあ…体が…熱い…」

機能を失った陰茎は女性器と同化し
大きな陰核として生まれ変わった



シヨウキ...

ドクン

ドクン

「あはっ…あははははっ…
僕のおちんちん…なくなっちゃった…」

気づけばまたユミルは失禁していた

ムッ
ムッ

性器が生まれ変わっても
お漏らし癖は治らなかつたようである

小さい女体からはオスを誘う
フェロモンも溢れ出し
それが害虫の肉棒をさらに熱くさせる

しゅ
お
お
お…



「ああ…すごい…♡」

ユミルはその剛直を見てさらに愛液を垂らし初めた

そして…

完全に女体化したユミルは気づいてしまう

ムッ

ムッ

ん…ん…ん…

「男根がエレメス^{これ}を狂わせていた元凶だったのだ」

「ご…ごめんなさい害虫さん…
謝るから…もう許して…」



「んあつり?!♡あつあああああああん♡」

ユミルの言葉に害蟲は男根で応えた

(え…?今の声…僕の…?)

ガクッ

それに伴い漏れ出たメスの嬌声に
ユミルは耳を疑う

「あつあつ…ちよ…まって…んっ♡」

ゼクン

ゼクン

ド
ク
ク
ク
ク
ク



「いや……っこんなので……
害蟲のオチンチンなんかでえ……んんっ♡」

苦痛だけの性交だけなら
どんなに良かったであろうか

あっ♡
あっ♡

ユミルの膣は処女にも関わらず
トロトロにふやけきり

なんの抵抗もなく
害蟲のに肉棒を包み込んでしまう

ポッ

グッ

グッ



「いいのよユミル」

不意にエレーナがユミルに語りかける

「私もね…初めはこんなの間違ってるって思ってた」

あっ♡

あっ♡

「でも…害虫さんのオチンチンを見た瞬間分かってしまったの」

「私はここで害虫さんのメスになるべきだって…♡」

「何…言ってるの…? エレーナさん…」



解らないふりをしてエレーナに問いかけるユミル

しかし女体化した生殖器から
ダラダラと垂れ流す本気汁がその答えであった

ゼクン

ゼクン

「いやあっ♡はあんっ♡らめっ♡
先っぽおっ♡先っぽらめえ♡」

さらに敏感な乳首とクリトリスも刺激され
自分がただのメスであることを自覚する

ニル
ニル
ニル

クツ
クツ
クツ

クツ
クツ



「お股じゃないわユミル」

「え…?」

「そこはね…オマンコっていうの♡」

「お…オマンコ…?」

はぁ…!

はぁ…!

エレーナは優しい口調で
ユミルに性教育を初めた

「それに…ユミルにはもうオチンチンはないでしょ?」

「そのビンビンに勃起したお豆さんは…クリトリス♡」

「クリ…トリス…?」

ニムル
ニムル
ニムル
ニムル

ク
ク
ク
ク

マ
マ
マ
マ

「ね？オマンコ気持ちいいでしょ？♡」

「そ…それはあ…」

「ほら言って？オマンコ気持ちいい♡って」

「オ…オマンコ…コ…気持ち…いい…」

おっ

おっ

「そうそう上手よ…ほらもっと♡」

「オマンコ気持ちいい♡」

「オマンコ…オマンコ…気持ちいい♡」

「ふっふっ♡その調子よ♡」

ムニムニ…

クニクニ

グニグニ



メスマンコ気持ちいい♡
めっ…メスマンコ気持ちいい♡

マゾマンコ気持ちいい♡
マゾマンコ…気持ちいい♡

デカクリ気持ちいい♡
デカクリ…ひぐっ♡
気持ちいい♡

ケツマンコも好き♡
ケ…ケツマンコも…
好き♡

チンポ大好き♡
チンポ大しゅき♡

蟲チンポだあい好き♡
蟲チンポだあいしゅき♡

ザーメンだあい好き♡
ザーメンだあいしゅき♡

くっさいチンポ汁欲しいよお♡
くっひゃいチンポ汁…んんっ♡
欲しいよお!♡

「おっ♡おおっ♡おっ♡おっ♡んほおっ♡
チンポしゆき♡チンポしゆき♡チンポしゆき♡チンポしゆき♡チンポしゆき♡チンポしゆき♡」

いつしかユミルは
自分の言葉で淫語を発しながら
蟲の陰茎を迎い入れていた

あゝ
はゝ

その娼婦のように腰を振る様に
男としての尊厳は全く感じられない

「ああ…すごいわユミル♡」

「害蟲さんのオチンポビクビクして
もう精液きちゃいそうよ♡」

グ
レ
ッ

グ
レ
ッ

ク
ツ
キ
ョ

ク
ツ
キ
ョ

—
—
—
—



「きてっ♡きてえっ♡」

「ユミルのメスマンコに
害蟲ザーメンどぶどぶしてえ！♡」

たっ
たっ

たっ
たっ

「初めてのオマンコで
チンポに即負けしちゃった
雑魚エルフのメスマンコにい♡」
「容赦なく種付けしてええええええ♡♡♡♡」

ト
ムッ

ト
ムッ

ク
ムッ

マ
ムッ



「んひいイイツ♥来てるっ♥
こっつてり害蟲ザーメンきてる♥」

「イツグイツグイグッ♥」

あへっ

あへっ

「またイグッ♥」

「オマンコイグ♥オマンコイグ♥
オマンコイグ♥オマンコイグ♥」



害蟲の精子が卵子の膜を突き破った瞬間
同時にユミルの理性は完全に崩壊した

そんなユミルをエレーナは
優しい目で見つめていた



「エレーナ…しちゃん…
ごめんらはい…私…害虫に負けひやいまひた…」

「いいのよユミル…」

はぁー…

あぁー…

「あなたはいつも
自分は半人前だって嘆いてたけど…」

「今のあなた…とつても立派なメスになってるわよ♡」

わぁぁぁ…

グッ



「あ…あはは…やったあ…♡
私も一人前になれたんだあ♡」

(嬉しい…
憧れのエレーナさんが褒めてくれた…)

はぁー！

はぁー！

「はは…あははは…」

彼女が元気な害蟲の赤ちゃんを出産したのは
数日後の話だ

わぁぁぁ…

ぽろぽろ





















